

中世史におけるドイツの商とハンザ同盟

宮 本 英 三 郎

内 容

- 一 はじめに
- 二 ハンザ同盟の素描
- 三 中世史におけるドイツの都市と商
 - (一) ドイツの都市の起源とハンザ同盟の素因
 - (二) ハンザ同盟とドイツの商
- 四 ハンザ同盟の活動とその性格
 - (一) ハンザ同盟の活動
 - (二) ハンザ同盟の性格
- 五 ハンザ同盟の没落(以下次号)

はじめに

昨年八月、西ドイツのケルン大学に滞在中のある日、ケルン市より約百キロ北に位するレムゴー市(LENGO)にエンゲルベルト・ケンパー(ENGELBERT KAEMPFER)の遺跡をたずねて同市庁舎を訪問したことがある。エンゲルベルト・ケンパーとは、一六九〇年、鎖国の日本にオランダ東印度会社の社員として上陸し、長崎の出島に二年

余を過したドイツ人で、帰独后、故郷のレムゴーで老大な『日本の歴史』(History of JAPAN)を書きながら、不遇のうちに世を去った、かくれた日本のヨーロッパへの紹介者である。

レムゴー市で彼の遺跡について聞いているうち、図らずもレムゴー市長フロール氏(Bürgermeister Flohr)からレムゴー市がかつてハンザ同盟の市であり、ハンザ同盟とともに栄えた過去を示す数多の絵画を庁舎の廊下や、議事堂の掲示で説明をうけるとともに、同市がハンザ同盟加盟市であった史実を市の誇りとして、市の公用文書にまで『古いハンザ都市』(Alte Hanse Stadt)のマークを付し、一般市民もまたこれにならって店舗の多くがこのマークを誇示するかの如く掲げているのをみて、ハンザ同盟とは、北欧臨海都市の結合という程度に認識のなかった私は、この市長の言葉に、ルール地域に隣接する平野のなかのこの都市までその加盟下にあった事実、ハンザ同盟に対する認識を新にするとともに、その由来と内容を究めたい意欲にかられるに至った。

たまたま本誌への寄稿を期とし、帰国に際し求めた文献と最近入手し得た末尾記載の資料とに専ら依存して、ハンザ同盟とその時代的背景とを一瞥することができた。経済史は全くの門外漢で、歴史にもまた疎い専門外の私が、前述の動機からでたものであるから固より貧しく、不足な研究と考察で貴重な紙面を徒費するに過ぎない結果を恐れるのであるが、他面、『ハンザ同盟』は、その名称のポピュラーに比較して内容の、専門家は別として、知られること少いことは敢て私のみに限らない気もするので、この拙文をおして中世ドイツ史において、商及びその商人団体並にそれを包摂する都市の置かれた環境をハンザ同盟をとおしていささか把握願えれば望外の光栄である。

一 ハンザ同盟の素描

ケルン市ギムナジウム(高校)の歴史教科書に指定されているヘールト・ホイマン著『歴史の辿った途』は、『ハ

ンザ同盟』について次のように記している。

『中世時代のドイツの商業、貿易は数多くの危険にさらされた。貧慾な領主や王侯は河川を航行する商人の貨物船を捕えては、高い通関税をとっていた。陸路の商人の貨車は強盗の襲うところとなり、時には一物も余さず掠奪された。海上の商船はバルト海といわず、北海といわず海賊に襲われた。

都市の商人達は相互に防御同盟 (Der Schutzbund) を結び、共同して雑兵 (Kriegsknecht) を雇って商品の運送を守らせた。

最も大きい同盟はハンザであり、ルーベック・ケルン・ハンブルグ・ブレーメン・フランクフルト・ダンチヒ・マ
ーグデブルグ等その他の商業大都市がこれに属した⁽¹⁾』

この短かい記述のなかに、ハンザ同盟の由来と役割、更にはこれを生んだ中世ドイツの社会事情とが秘められているように思う。更に同書はその発端にあたって市民に呼びかけた記録として次のように記している。

『ルーベック・ローストック・ウイズマール各市のキリスト教徒の各位よ!!われわれ商人は海を越え、陸を越えて商品を運ぼうとしても、海でも陸でも強盗や追剥に脅かされて、これまでのような平穏も安全ももう保たれなくなつた。そこでわれわれは共同して次のように宣言する。

教会や、教会の広場へ運ばれる商人の商品をかすめるものには、海上であると陸上であるとを問わず、平和を与えられるべきではなく、追放せらるべきものである。また彼等が略奪してきた商品を携えてきたとき、これに場所的な便宜を与えるような市や村は、われわれ結合した商人は略奪者と同罪として追放せらるべきものと考え⁽²⁾る』

一読してまことに悲痛を覚ゆるものであり、同書はこの記録を一二四九年としてハンザ同盟の起源としている。

ハンザ同盟のほかに、中世ドイツには南部バイエルン地方を中心としたシュワーベンあるいはライン都市同盟と、

同じような目的にでたものもあったが、その規模と活動とにおいてハンザ同盟に比すべくもなかった。

注 (1) Heerd-Heumann Unser Weg Durch Die Geschichte S. 62

(2) 当時の商取引が教会や教会の広場で催された市場 (Markt) で行なわれたため商品はそこへ運ばれた後述。

(3) 同書 S. 63

ハンザ (Hansa, Hanse) の意義をドイツ語の辞書に求むると、ハンザ同盟都市、その市民という以外に語源を明らかにしていないが、もともとハンザという名称の都市があったわけではなく、ゴート語から出たもので、その意味は当初ゴート族を象徴する『勇敢な騎兵隊』 (Streitbare Schar) の意味に用いられたが、のちに一般に、『結合、連合』 (Vereinigung) または、『協同、団体』 (Genossenschaft) の意味に用いられたという⁽⁴⁾。これはまた後述するとおりハンザ同盟の性格を示しているように思われる。

(4) Hans Konrad Roetbel Die Hansestadt S. 166

ハンザ同盟を冒頭に引用したところからみれば、中世ドイツにおける商人が商の不安と侵害に対抗するために都市を挙げて、相互に結んだ『商権擁護の自衛策』といい得るであろう。そのためには一種の兵力をも備えたのであるが、その当初の文書をみても明らかのように、その発端は当初の商人に対して市場の開催や場所について許諾の権を握っていた諸侯・領主・司教 (Bischof) 等の支配者に対して、商人相互が共同して交渉する平和的団体で、その底には一部市内の商人は固より、他都市の商人相互においても友好的な親交関係 (Bruderschaft) が基調をなしていたという。

とはいえ、当時の商権がいかに不安であったかはいまなおその名の残るウィキング (Wiking) の例をみても理解

できる。ウイキングとは、八世紀から一〇世紀へかけて北海やバルト海に出没した豪胆な海賊で、当時の北欧の海上貿易を不安におとしめたので、彼等の船はウインキンガシップ (Wekingerschiff) として一般から恐れられた。彼等の活動は海上から陸上にまで及んだようで、例えばハンブルグのごとき、現在の前身の市はカール大帝がザクセンを鎮圧后紀元八三一年にエルベ川に沿って建てたといわれるが、その後二世紀の間に八回も破壊されたという。そのうち七回は八、九世紀頃ドイツ北東部に移住したスラヴ民族のウエンド族 (Wenden) で残りの一回はウイキングであったという。⁽⁵⁾ から、商人の物資を略奪するぐらいは彼等にとって日常茶飯事であったであろう。

(5) Die Hansestädte S. 291

三 中世史におけるドイツの都市と商

(一) ドイツの都市の起原とハンザ同盟の素因

紀元五世紀より一五世紀までを中世期とするならば、ハンザ同盟の成立したといわれる一二五〇年⁽⁶⁾は、既に中世の後半期の半ばに該当し封建制度はドイツ全土に定着し、フリードリヒ二世の死んだ年とも記録されているが、この頃の皇帝のイタリヤ政策のためドイツの内政は久しく疎外されて、内政は専ら諸侯、領主、司教等の握るところとなり国民は都市といわず、農村といわず彼等の支配に服すとともに、商人は支配者が皇帝より与えられた物資の集散、開市、醸造等の強い権限の前に種々の制限を忍ばなければならなかった時代であった。

それとともにやがて始まる皇帝欠位の大空位時代を前にして、帝権は弱体化し、国民はいやおうなしに自力救済の方策を考えなければならなかった時代でもある。

ハンザ同盟はかかる時代的背景のもとに生れたものと思われる。したがってそれは可なり長期にわたる自然発生的な萌芽時代を経て盟約されたことは前述のとおりである。

ドイツの都市発生の歴史を一瞥すれば、西南部に位する諸都市と、ハンザ同盟を生んだ北東部に位する諸都市との間には一〇世紀に及ぶ時代的間隔がある。前者の多くはライン川に沿ってローマ人によって建てられたものが現在でもその当時の遺跡が多く、ケルン・ボン・コブレンツ・ウイースバーデン・マインツ・ストラスブルグ等はドイツ建国以前既に高いローマ文明を享受していた。

筆者は昨年、ケルン市において戦後ケルン市を中心として発掘されたローマの貴族、市民の日用品の数々の出土陳列品を見る機会を得たが、その精巧、緻密な製品は二〇〇〇年の歳月を超えて現代を思わせるほどであった。

ローマはカエサル (Caesar 前100—44) の死後、アウグストゥスによってラインを超えてエルベ川まで攻めたが、ゲルマン人の抵抗によって成らず、退いてラインを境としてローマ帝国を守らなければならなかったというから、もともとこの北東部の住民は勇武な民族であったと思われる。

ドイツ始祖の皇帝であるカール大帝、初代の皇帝であるハインリッヒ一世、その子オットー一世等建国初期の皇帝はいずれも東方開発のための移住政策をとり、ハンザ同盟発祥の都市として代表的な、ルーベック、ハンブルグ、ブレーメン、更にはダンチヒ・リガ・レワル等現在、東ドイツ、ポーランド・ソ連邦に属する都市までその当時市の基礎を建てたものであるが、オットー一世の死后帝位を継承したオットー二世、三世はつねに力をイタリアの経営にそそぎ、ドイツの内事を顧みず、国内の治世は専ら諸侯 (Landesherrn) に委せられた。

東方移住開発政策は建国初期の皇帝の相継ぐ英知をもっても容易でなく、騎士、修道士、市民、農民と凡ゆる階層を求めて西南地域より移住させたが、民俗移動の事由もあって既に住民の稀薄化している地域にその目的を達するこ

とは容易でなく、往々にして新たなスラヴ民族の襲撃に悩まされなければならなかった。移住者はそこで広い土地を与えられ、これを耕作する以外に支配者に対する賦役は課せられなかったとはいえ、気候、風土を異にする荒蕪の地域での彼等が都市や農村を建設するまでの生活は容易でなかったであろう。『最初は死、次いで困苦、第三番目が食料』とは当時の移住者の苦境をよんだ言葉であるという。⁽⁶⁾

(6) Heerdt-Heumann Die Geschichte S. 53

ゲルマン民族はもともと、北ドイツ、デンマーク、南スウェーデン等の北欧地域の住民であるといわれるだけに彼等は南部へ移動後もその当初の生業は狩猟や農が主なものであり、商のみちには疎かった。ローマ帝国とライン川をはさんで対峙していた時世に、ラインの左岸に既にローマ人によって絢爛たる都市文明の築かれていたケルンやコブレンツ、ウイスバーデン等の諸都市を訪れたゲルマン人はその華麗な生活ぶりに目をみはったという。と同時にローマの商人はラインを渡ってゲルマンの地域に來り、その村落をたずねてガラス器具や楽器、真鑄製の用品、更には薬味や酒類まで売りに來て、彼等の持っている牛馬、穀物、毛皮、時には女の金髪等を対価として得たという。これによってみればゲルマン人に商のみちを教えたものはローマ人であり、ドイツの都市化が建国初期の皇帝以後、中絶されたなかに比較的短期間に発達したのはローマの遺業に負うところが大きいといえるであろう。

とはいえドイツの都市の発生とこれに伴なう商人階級の台頭、更にはハンザ同盟の発祥に関連してその大きなファクターとして考えなければならないのは十字軍である。

十字軍は一〇九五年法王ウルバン二世の聖地回復の呼びかけに応じて、西欧キリスト教徒がエルサレム奪回のために行なった遠征軍であることは改めて説くまでもないが、これに騎士、修道士、市民とともにドイツ全土から参加し

た農民は、その数においても前三者に比べて圧倒的に多く、彼等遠征軍の多くは聖地に至る道程はもとより海陸の距離すら知らず、途中飢餓、悪疫、疲労のため倒れ、ために七回の遠征をもつてもその目的を達することはできなかったが、これによって農民階級の地位の向上をもたらしたことは数ある遠征軍の結果の重要な一事であった。すなわちこれまで封建領主に隷属させられていた農民は、十字軍の犠牲の対価として解放せられるに至った。

自由の身となった彼等のあるものは東部に移住し、あるものは都市を求めて移り住んだ。多くの都市はその規律に従って『一年と一日』その都市で生活し得た農民に始めて市民(Buerger)の地位をみとめた。かくして農民(Bauer)から新にビュールゲル(市民)になるものが多くなるにつれ、都市人口は次第に増加し、その結果衣類、穀物、食料等の需要もまた増加し、農村に残っていた農民の生産意欲を刺激し、両者を媒介する商の発達を促がすとともに農民の生活を豊かにしてその地位を向上させた。

十字軍は農民の地位を向上させる結果となった反面に、騎士階級の没落の一つの素因ともなった。十三世紀末まで七回に及ぶ遠征軍には騎士は不可欠な主要な役割を続けたが、遠征軍の終了とともに彼等の任務は失われた。封建諸侯を保護する任務は依然として残されていたが、十字軍を契機として旺盛となった騎士熱に養成された数多い騎士の生活を支えるには到底不十分であった。

加うるに東洋よりもたらされた火薬の輸入は封建諸侯の戦術を一変して、この新兵器の前に騎士は影失せて失業、貧困の苦悩にあえぐもの多く、その結果は市に向う商人の物資の輸送車を途中に待ち伏せして、これを襲い物資を略奪したり、あるいは金銭を強要、強奪するもの至るところに現われて、この階級の没落を物語るとともに商の不安をいよいよ高めるに至った。

(二) ハンザ同盟とドイツの商

中世ドイツの都市で市 (Markt) を中心として、商取引が行なわれていた当時の模様について、ホイマンの前述の著書は次のように述べている。

『大部分の都市は開市権 (Marktrecht) をもっていた。これは領主からか、あるいは国王から直接に授けられたもので、市内で市を開くことを許されたものである。市 (Markt) は教会や教会の広場で催されたが、その日は旗を掲げて市の開らかれていることを市民に知らせるとともに、その日市内に滞在しているものは市 (City) の規則に従わなければならなかった。と同時にこの日のために物資を運んでくる商人は通門税 (Torzoll) を払わなければならなかった。』

これは都市の主な財源であったが、そのほかに都市は、貨物が都市内で積換されたり、加工されたりするときは商人から一定の税を払わせる貨物集散権 (Stapelrecht) をもっていた。

ドイツといわずヨーロッパの大都市間にはきまった商取引ができて、この市を目ざしてドイツ国内の商品はもとより、東洋産の、じゅうたん、布地、織物等が小アジアから船でイタリヤ経由で運ばれてくるようになった。市をとおして北東部の毛皮や羊毛が、イギリスや北海沿岸地方でできる毛織物と売買されたり、陸路ではザルツブルグやルンネブルグの塩や、ミュンヘンやピルゼンのビールが運ばれるなど物資の集散は市をとおして都市の繁栄につながった。

そのなかで主な市はフランクフルトとライプチヒで、このときは遠近の商人が沢山の物資をもって集ってきてその取引高は頗る多額にのぼった。⁽⁷⁾

物資の売買の場所が市から商人の店舗に移った後年に、物資の見本市を『メッサ』 (Messe) と呼ぶのは、これま

で述べた市が教会の礼拝日（ミサ）に行なわれた名残りである……』

(7) Heerdt Heumann S.62

思うにフランクフルトとライプチヒはハンザ同盟とシュワールデン都市同盟との接合する地点の都市であったので自然と市が大きくなったもので、これをみてもこれらの同盟が都市の発達に与えた影響を推測し得る。

フランクフルトで催された当時の市がいかに盛大であったかを、同市で発行される月刊雑誌、スキヤラ (Scala) は次のように記している。

『……物資を運ぶ商人の途中の安全のために皇帝の護衛兵に彼等は先導された。当日は荘厳な儀式のもとにフランクフルトの各方面から車は続々と進められた。メッセの開始を告げる鐘の音が教会の塔から高らかに告げられると市民は一斉に集った。これによってフランクフルト市が得た収益は市民から徴収する一年間の収入の倍額にも達した。これについて当時の年代史に次のように書いている。『……メッセの意義はエジプトのナイル河の氾濫にも等しい。泥を運んだか、金を運んだかの違いはあるが……』⁽⁸⁾

(8) Scala 1966年11月号 S.21. Markt-Platz Der Nationen)

中世ヨーロッパは封建制度とキリスト教の時世であるといわれる。教会の礼拝日に旗を換げ、鐘を鳴らして商人の物資の市が催されたということは、それが都市の財政にからんでいたという理由はあっても、商人及び商に対する観念は日本の士農工商のそれに比して遙かに高いものであったと考えられる。

次はそれを示す事例としてレムゴー市誌から引用する。

『毎年の定期市の前後二日は何人も審判に付せられない。ただし突発に新たな犯行を犯したり、追放者が捕えられた

ときはこの限りでない……』と、当時の商がいかに高く評価されていたかを推知し得る。

(9) Lemgo S. 24 Das privilege von 1245

四 ハンザ同盟の活動とその性格

(一) ハンザ同盟の活動

一四世紀の後半期の最盛期には、加盟都市百に及んだといわれるハンザ同盟も、その代表的とみられるものはルーベック・ハンブルグ・ブレーメンの三都市であろう。ケルンを加えて四都市とすることもできようが、冒頭の発祥の歴史にも示すとおりバルト海と北海に臨む三都市の海上貿易の不安が、この同盟を生み強大に育てたことは否み難く、なかでもルーベックはその中心的な役割を演じたようである。

現在ルーベックの人口は二四万でハンブルグの一八五万、ブレーメンの五七万には遠く及ばないが、ハンブルグがエルベ川によってバルト海に臨み、ブレーメンがウエザー川 (Weser) によって北海へ臨んでいるのに対し、ルーベックはルーベック湾によって直接バルト海に臨む地理的環境は、当時の北洋貿易に如何に便であったかは想像に難くない。それかあらぬか、ハンブルグ・ブレーメンがともにカール大帝によって九世紀の初期に都市の基礎を建てられたに反し、ルーベックはハインリッヒ、レーウエ (Heinrich d. Loewe) によって建てられたというから約二世紀の間隔があったであろうが、湾に沿った当初の市街には早くから西部地方から移住した、ゲルマン人の手工業者の手工所や店舗が並んでいたという。

以上三市がともにゲルマン人によって、荒漠の原野から出来上ったのに対し、ケルンは既述のとおりローマ人によって紀元后五〇年頃建てられ、この当時既にその人口はアテネ、カルタゴに匹敵したといわれるから、これをローマ

からかち取ったゲルマン人は創業の苦を経験していないというべく、ひとしくハンザ同盟の加盟市といってもこれに依存した割合は前三市や他市に比して少いものと思われる。その関係であろうか、筆者の手許にあるケルン市誌をみてもその短編の故か、ハンザ同盟についてのこの都市の歴史は一行も記されていない。⁽¹⁰⁾

(10) Koeln Cologne

さて、ハンザ同盟の商の順路と思われるものを地図で辿ってみると、海上貿易はルーベック、ハンブルグが主たる起点で、そのほかステッティン、ダンチヒ等を基点としたと考えられる。ルーベックからはバルト海を航行してデンマーク・ノールウェイへ、あるいはスウェーデンまたはロシア大陸へ通商ができたであろうし、ハンブルグからはエルベ川を経て北海へ出て沿岸のベルギー・オランダ、フランスに属するいわゆるフランドル (Flandern) を経てロンドンへの通商の途が開けていたであろう。そのほか、ステッティン、ダンチヒ等もルーベックより更にロシア大陸寄りの地位から当然この方面への海上貿易ができたであろう。

次に陸上の順路であるが、これもルーベックとハンブルグを中心として三つの主な経路が考へられる。一つはルーベックより順路を東にとり、ステッティン・ダンチヒ・ケーニヒスベルグ等を経てロシア大陸のノウゴロド (Novgorod) への経路、次はルーベック、ハンブルグより順路を西にとりブレーメンを経てケルンに至り南下してフランクフルトに達する経路、他はルーベック、ハンブルグより南下してブラウンシュワイグ、マールブルク等を経てライプチヒに至る経路等である。

このうち一を除いた二つはフランクフルトとライプチヒがシュワールベン都市同盟との接合点で盛大な市 (Markt) が催されたことはフランクフルトの例について既述のとおりである。

順路は上述のほかにも、加盟都市の数からみても更に種々の多岐にわたったものが縦横にできていたであろう。か

りに一系統の順路を一貫した場合の所要日数など明らかでないが、ルーベックからハンブルグまでの僅か四・五〇キロと思われるところでも、輸送は一〇から一四日を要した⁽¹⁾というから全行程は長い日数が必要としたことであろう。

(1) Die Hansestaedte S. 26

陸上で都市のマルクトが教会の礼拝日に荘厳に行なわれたことは既述のとおりであるが、ハンザ同盟の海上貿易ぶりはその果敢なこと一般に知れわたっている。

彼等はコッゲ (Kogge) という舷の高い帆船を使用したという。思うに波の荒い北海で安全に物資を輸送するには、当然必要とする船体の構造であつたであらう。この船は当時ハンザコッゲ (Hansekogge) と呼ばれたという。恐らく愛称の意味であつたと思われるが、彼等の活動が高まるにつれてその構造も変り、高い舷側に船のへききから船尾まで幾つかの階を重ねた、大きな船体のものになっていった。一五世紀にみられた最大のものは、『ルーベックの鷲』 (Adler Von Luebeck) という船の長さ八〇メートルで、一〇七五人も乗船可能な当時の巨船で、しかも船上には砲身四二、楯五〇〇をもつて武装されたものであつたという。

彼等はこれらの船でバルト海から、北海を完全に支配することができ、そのうえデンマーク国王とも一戦を交えて勝利を得たといわれている。そして運んだ物資の主なもの、穀物、乾魚、鉄、木材、毛皮、布地等であつた。

他方、陸上のほうも最盛期には、東のコースはダンチヒから南下してトーム (Thorn) を経てワルシャワから更に東へ、西のコースはケルンからパリにまで到達し、かくして北ヨーロッパの数市を起点とするハンザ同盟の通商路は、海陸ヨーロッパの広い範囲に物資の交流を拡めて、中世ヨーロッパの経済に及ぼした影響は測り知れないであろう。

(二) ハンザ同盟の性格

ハンザ同盟がルーベックの指導のもとに結成され、当初は、領主や諸侯の支配権に対して商権の伸長のために、商人相互が、都市内で次には都市間に親睦的、扶助的な団体を結成したものが、高まり激増する商の不安と侵害のために都市同盟団体に発展し、その内容も相互扶助団体から防護団体へと転化し、その勢力も次第に強化されたことは既に述べたところである。都市がその存立のために必要な財源を、商人の市の開催に依存していた当時において、商人の商の不安は都市の不安であり、都市はこれに無関心たり得た理由はないからである。ハンザ同盟は正しくはハンザ都市同盟である。

当初の親睦団体の基調は、盟約者または誓約者同志 (Eidgenossenschaft) であつたともいい、あるいは義兄弟関係 (Schwurbruderschaft) であつたともいうのみで、その内容は詳かになし得ないが、加盟都市の商人が商の途中で難船 (Schiffbruch)、病氣 (Krankheit)、あるいは拉致 (Gefangnahme) 更に罪に陥入った場合はこれを扶助するというのであるから相互扶助を内容とする団体である。こういう団体は当時それぞれの地域に、近隣都市相互間に個別にできていたとも考えられるので、冒頭記載のルーベック、ウイズマール、ローストックの呼びかけもあつて、防御同盟としてのハンザ同盟は結成され、最初の数都市から次第に加盟市がふえて順次に強大になっていったものと思われる。

(2) Die Hansestadt S. 70

防御同盟の性格をもつて、海に陸に活動するようになって、彼等は最後までこの平和的、親睦的盟約の精神を失わなかったという。それとともに加盟都市百に及ぶ一大団体を形成し、一九世紀まで続いていたがらハンザ同盟の規約として後に伝えられるものは一つもなく、全くの盟約団体であつたともいう。⁽¹³⁾

したがって、その運営がどういう組織のもとに行なわれたかは全く詳かになし得ないが、ただルーベックを頂点とするこの団体の加盟市は、年一回ルーベックで開かれる召集日には加盟市の代表を、ターグファールト(Tagfahrt)と呼ばれる予め日程の定まっている審理に派遣する義務を負っていて、この義務の履行は厳重に守られていたというから、恐らくこれがこの団体の總会的機能を果たしたものと思われる。

加盟都市の一つであり、筆者にこのテーマの興味を起させたノルドライン、ウエストハアーレン州の一小都市レムゴアの市誌『レムゴア』にはこの点について次のように述べている。

『レムゴア市がいつハンザ同盟に加盟したかは明らかではない。一三世紀末には加盟市であり、ケルン地区に属し近隣のドルトムンド、ミュンスター、オスナブルック、ミンデン等の諸都市とともに、投票権を行使するためルーベックのターグファールト(審理)に召集されていたことは疑もない。

レムゴア市はその審理に毎年一五ターレルン(Taler)⁽¹⁴⁾の税を払わなければならなかった。この審理に代表を派遣することは加盟都市の義務で、若し的確な理由もなくして審理に欠けた都市は、一マルクの罰金⁽¹⁵⁾を課せられこれを支払わないときは審理は同盟から脱退させることができた⁽¹⁶⁾』

(14) Lemgo S. 63

(15) ターレルは一九〇七年までのドイツの通貨

(16) マルクは現在もドイツの貨幣単位であるが、当時はライヒスマルク(Reichsmark)であったと思う。

ハンザ同盟については、以上の外明らになし得ないことが多いが、彼等が一貫して守ったものは親睦と友誼を基調とする兄弟愛、ブルーデルンシャフトであり、一貫して目指したのは商の伸長と擁護であったことは明らかであ

る。

彼等の標語として伝えられる『われらの舞台は世界である “Mein Feld ist Die Welt”』はそれを証しているように思われる。

それ故にこそハンザ同盟の精神は、こんにちなおドイツ人の心をゆり動かし、レムゴー市のごとく『古きハンザ都市』の表示のもとに過去の市の歴史を偲びこれを誇りとするもの、あるいは故国を離れてなお『ハンザ』の商号で店舗を営むものがみられる所以ではなからうか。

五 ハンザ同盟の没落——近世史のなかのハンザ同盟（次号）

ハンザ同盟は中世史を頂点として没落過程に入った。蒸気機関、電信、電話の発明、アメリカの発見にともなうヨーロッパ北洋海域の新しい支配者の出現は、彼等の商法の根柢を揺がした。近代文明のまえに、かつては不死鳥のように逞しさをみせたこの同盟も、一九世紀をもって歴史のなかに没してしまった。

この没落過程を次回に『近世史のなかのハンザ同盟』のテーマで追ってみたい。

参 考 文 献

Heerdt-Heumann Unser Weg Durch Die Geschichte

Hans Konrad Roetzel Die Hansestaedte

Baedekers Deutschland

Lemgo Stadt Lemgo

Koeln Stadt Koeln Cologne

International Scala 1936 Nr. 11, 1968 Nr. 3.

Wilhelm Treu Deutsche Geschichte